



ハートコール・えひめ

響 音

(ひびき)

No.80

発行 チャイルドライン ハートコール・えひめ
〒790-0808 松山市若草町8-2
松山市ボランティアセンター内
Tel 089-923-9558 Fax 089-925-1253
E-mail heart-call@sgr.e-catv.ne.jp
H.P. <http://home.e-catv.ne.jp/heart-call/>
発行責任者 染川 まどか
発行者 佐伯 典合子

「チャイルドライン ハートコール・えひめ」講演会

大人が立ちどまらなければ～豊かな時代を「生きる力」とは～

日時:2008年6月29日(日)13:30～16:00

場所:松山市総合福祉センター5F中会議室

講師:小柳 晴生氏(元香川大学教育学部教授・放送大学客員教授・臨床心理士)

参加者:58名



小柳氏は広島大学・香川大学で、20年間学生相談カウンセラーをつとめられていましたが、2005年に退職、瀬戸内海を眺められる山中で「半隠居生活」に入り、自分と付きあう生活に挑戦中です。小柳氏の講演をまとめます。



今、子どもや家庭に何が起きているのか、どう対応したらいいのか考えてみます。

まず、子育ての時間と、それ以外の生活の速さがどんどん開いていることです。子育てに求められる速さは時速4kです。他方、仕事や日常生活でのスピードは時速60kです。現代社会で子育てををするということは、2つの違った世界を一日に何度も出入りすることになります。これは親の心に大きな負担を強います。子どもを大人の都合に合わせるのではなく、大人が子どもに合わせることで、生き方の変更を実現する可能性が見えてくるように思います。

現代社会で最も普遍的に追い求められている価値は「人生の幸不幸、寿命や健康、何でも思い通りになるはずだ」という考え方です。ところが子どもは親の思い通りにはなりません。これが私たちの不安をかきたて、いらだたせるのです。子育ては、ともすれば自然から離れがちな私たちを自然に引き戻す貴重な営みとも考えられ、傲慢になった私たちが謙虚に生きることを教えてくれる哲学的な営みとも言えるのです。しかし、子どもは小さく非力です。大人に貴重なメッセージを受け取る力がなければ、子どもを踏みつぶし、ひいては自分自身も踏みつぶすのです。

今日のような豊かな社会で親になり家庭を持つと、「どんな生き方・働き方をするか」「どのような家庭を営むか」「子どもとどのような時間を過ごすか」という3つの創造を同時にしなければならぬのです。自分の内的な感覚を手がかりに、試行錯誤しながら新たな価値を創造するしかないのです。これからの



時代を生きる力は、豊富な知識や優秀な成績をおさめる学力でもなく、自分と深くつきあえる「哲学する力」で

あり、それは家庭で育まれるものではないかと考えています。



いまの子どもたちは物や情報の洪水に放りこまれ、沢山の選択肢から自分が求めている物、必要な物、生き方を選び取りながら泳ぎわたるという難しい課題に直面しています。しかし、大人たちからは「欲しい物は何でも手に入るぜいたくな中で、まだ何が不満があるか」と、欠乏の苦しみを持ち出されて説教されるのです。

私たちが経験したことのない困難な課題にけなげに挑戦しているのに、そのしんどさをわかってもらえないばかりでなく、むしろそしられるという二重の苦しみを味わっているのです。

この豊かな時代を生きる力とは、第1に「曖昧な状況を模索的に生きる力」です。つらくてもうまくゆくかどうかわからないリスクを背負い、道を作りながら進むしかない、そうした生き方を身につけることが求められることになったのです。

第2に「自分とつきあう力」です。曖昧な状況を生きるには、「自分が何を望んでいるのか」、「どう感じているのか」が羅針盤やナビゲーターの働きをします。自分で楽しみを味わい、結果を自己評価する力も要ります。豊かな時代では、自分の声が聞こえないとどう進んでいいかわからず途方に暮れて立ちすくみ、時には遭難さえしかねないのです。

第3は、「自分と折り合う力」です。沢山のことをあきらめたり、苦勞して選んだことがうまくいかないときにやけを起こさない力が必要となるのです。選ばなかったものを諦めるのは、思ったよりも多くのエネルギーを必要とする作業であり、選択肢が増えるほど判断に割られるエネルギーは莫大になります。

第4は、「**哲学ともいうべき内的な倫理観や価値観、センスに裏付けられた節制力**」です。自分にとって何が大切かをはっきりさせ、それ以外はなるべくこだわらない、関わらないという生き方を確立していないと、誘惑に振り回され地雷を踏んでしまいかねないので。そうでなくてもあれも必要これも欲しいと取り入れれば、頭の中はさまざまな情報で一杯になり、本箱から本があふれ出し、大量の物や情報に翻弄されることになるのです。

第5は、「**膨大な他人と付き合う力**」です。今の子ども達は、「対人関係が下手になった」と言われますが本当でしょうか。子ども達の関わり方を見ると、実にこまやかに配慮しています。大人の目に子ども達の間人関係が下手になったと見えるのは、対人関係のあり方が変わったためだと考えています。豊かさは対人関係も大きく変えました。日々おびたしい人と出会い、瞬時に難しい判断を下しながらつきあい、こじれずに別れる作業を繰り返さざるを得なかったのです。人との関係を取り結び維持してゆくためには、自分とうまくつきあい折り合えることが必要です。他人とつきあうことは、自分との好ましい関わりが基盤にあってはじめて可能になるのです。自分とつきあえるようになるには、「自分とつきあう時間」を十分に確保することが必要です。

このような時代に大人が子どもにできることは、第1に「**あなたといるとうれい**」と存在へ

の自信を与える事です。一緒にいてうれい、楽しいと感じていることです。これが自分を恃む力、

自信の元になるのです。これがないと過酷な豊かさを生きてゆこうという意欲は湧いてこないのです。子どもが何か出来るか、あることに優れているからとか、大人の言うことをよくきくからでなく、この子がいてくれることがうれいことがポイントなのです。



第2は「**やってみたら**」という感性への自信を与える事です。子どもは大人に話を聴いてもらいたがっています。そして、正確で深い理解とそれに基づいた応答を求めています。これが心の栄養になるからです。大人からの肯定的な反応が、自分の感覚ややっていることに自信につながるのです。子どもと話しているとき、「なるほど」と肯定的にうなずいてますか。それとも、「いや、それは違う」と説教がはじまりますか。周りから肯定されることで、自分の感性が信頼できるようになるのです。豊かな世界では感性への自信がないと、物と情報の渦に巻き込まれに立ちすくんでしまうのです。

第3は人を元気にする言葉「**よくやっているね**」という心の栄養補給です。褒め言葉に「よくできたね」か「よくやったね」か、2種類があります。「よくできたね」というのは、成果や結果を褒める言葉です。「よくやったね」は、意欲を褒める言葉です。後者はうまくいかない時でも褒められます。これがねぎらいです。ねぎらいの言葉は、自分が自分をねぎらせる人でなければできないのです。大人も子どもも互いに「よくやっているね」という言葉が飛び交うような社会が実現することを強く望んでいます。



小柳晴生氏著書紹介

生活人新書「大人が立ちどまらなければ」 定価 714 円

「ひきこもる小さな哲学者たちへ」定価 693 円

【松山子ども劇場21子育て講座で代表、講演する！】



6月4日(水)10:00～

参加者 26名

「子どもの声から見えてきたもの」というテーマで講演とワークをしました。会員以外の参加者もあり、大好評でした。愛媛新聞の取材を受けました。

【インフォメーション】

◆ 木と人をつなぐ映画祭(マネキネマ主催)

「水になった村」監督:大西暢夫

「トントンゴギゴ工の時間」監督:野中眞理子

7月12日(土)10:00～コムズ

参加費:1200円

問合せ先 TEL089-973-9570

◆ えひめ母親大会

第2分科会 教育「子どもの瞳が輝くときー
日々の悩みは生きるカー」

森 美加氏(「啓祐、君を忘れない」の著者)

山本万喜雄氏(愛媛大学教育学部教授)

7月13日(日)10:00～16:00

松山市総合コミュニティセンター

参加協力券 1,000円

問合せ先 TEL089-933-2493

◆ 麦の会特別講演会

「子が宝なら、母親も宝」明橋大二氏

7月26日(日)13:30～16:00

愛媛大学教育学部2号館大講義室

参加費 2,000円

ご支援をお願いします

<振込先>郵便振替

口座番号 01680-0-8867

「ハートコール・えひめ」

【ご支援ありがとうございます】

大切に使用させていただきます。

宮崎吉二氏

※書き損じハガキがありましたら、ぜひご寄付ください



【編集後記】

今回の講演会の講師である小柳氏は55歳の時、大学と25もあつた役職・肩書きをやめ、田舎で隠遁生活をされています。家族はむしろ賛成をされたそうで、娘さんは気に入りよく帰省されるそうですが、奥様は田舎生活がイマイチだそうです。もし私の夫がそのような事を言ったら、とても受け入れる事はできそうにありません。頭で理解できたとしても、自分の心と身の回りと、何より将来と老後と、そして世間と体裁と・・・様々なものが立ちはだかつてとても「いいんじゃない、やってみたら」

などとは言えません。

愚かな自分でしょうか。

(染)

